

五日ろりけとバ上ノ飢渴小疲果て其人とも見一匹憔悴し多と  
 不義の佞人有て三大將潛小申上をきまひと申一吉も將使を立  
 て會合して是を聞彼者傍の人を退らる一と申けき一吉田中  
 九津見大河内小向く立去り由よりけふあ人の畏る座を立及所  
 仍大河内如何振此者之不思議の思慮を廻まと思つりと思ひ  
 初を念く一吉を中なる八角大軍小圍を只今小討死仕真主との  
 以供中を其共小何事を隠し給ふきと荒らう小申けき彼  
 者是罪か一て去る城內已小米水なく皆をき内小饑死一  
 三大將の内命ハ士卒小比き小比き上の山為山身の為速小城内を  
 以出有る後詰の勢を催給ふ一幸小馬三走得は是小百と

江を渡一向方地(山岳)を事いと安らひのふと一と持しける  
 三大將眼を見合て未返答も無り一に大河内圍や否や夫軍將飢  
 渴を軍士と共小一給ふ事古りの道ぞう一而も此城と申を  
 遠く日本の地を離れ大明の攻と云々命を惜しと思はれ有る  
 き日本と云兵猶私一況他國小おひてとや維命を助り給ふと  
 何の面目有る人小まふ給ふ座よもと六士卒の身命小大將代  
 給ふ共大將の内命ハ士卒を代給ふと云給ふ名義も小申條ハ涉  
 身小入給ふと云給ふ孺子角の推氣を立退一とはも荒らる云  
 けき三大將一同小大河内口上尤も極せりと因せり一六不  
 義の佞人手を失ひ面を赤めて退出を大河内を立て馬有り

依て加勢の傷人出まるとして大青小舎人を大將達の陣に出せ  
と云まふ腰の刀を引抜て一々首を刎りたる相城内の軍士時分  
を計り夜討小舎敵屋の夜討小舎を焼て平砂小舎皮を  
き胃の上小霜と交眼を休べして鉄炮小大繩を掛ら小矢を取  
そ鎗の槍首を握て慥小陣と固め居る所一銃兵二百も別を  
押並んぐたふ吐と打り全散し我々志のきと利り鐮を破と  
しども大國の軍法仕置三友依て大崩味方付せまらばるる隣  
陣曾て加勢きぐ板小勢の槍兵望のまふ敵の陣打敷味  
方まふ付しぞ引取らばるる小勢を杖小突らうくせ我々  
帰りける大河内何門を渡おとて居りたる毎日二度二度

切ておとせぬも一及も人小先をせき後降り一々幸長の軍士  
とも何卒して大河内が先小先と互ふを勵けけは飢渴  
の苦勞も志とりの勇士の志を鉄石より堅うりけとと目を  
驚き付あり  
廿七日早天より又大敵雲霞のぬく攻上る籠兵教日登取の攻列  
るれバ何れ公勢きき突まら一割落一防戦い堀裏堅固ある辰  
の刻汗小悉引一々味方息を休めり然る如小筑黄門  
秀詮公の家老山口玄蕃元をたて蔚山の築城頼依小乃の由緒  
兵等下小捨殺しき小罪を急ぎ加勢をへ一但南城釜山海ハ  
日本の運送自由第一の港をこが大明人蔚山の人数をたて音

城を攻むと云事有らば左衛門少将たる平若年より  
 善城の方便を知り又野合の働に松子を見計て随分智略を  
 廻さす汝と寺澤志摩も是れ在り堅く城を攻むと宣  
 ば玄蕃元上將軍の伊身も勿體なき事と制し奉りぬ其  
 以取らぬとて廿六日釜山海を以て馬あされ廿八日の其道を一  
 日一夜小善今日の辰の刻に小善山を所の丸山小備を立  
 と等く見和泉守加藤左馬介毛利を攻むと出はき今曉  
 夜小修まで大敵の圍を乗破り蔚山へ入ると仰あり三人種  
 言上仕るハ廿五日以来其都を色々と相討仕得共大敵の敵  
 いづれバ力業も謀るも及難くい少一時節を以て逃ぐ由

申上る相黒母衣の使者も人にては上は信分れ籠城の三  
 將(きん)の年の刻に小善山向の入海の岸に黒母衣の武者二騎来  
 て扇を揚ぐ城を招く龍兵南方の塙の上へ飛上り何事やらん  
 と問ふと城内の三將并軍士共鳴を静めて上意の品を申し  
 大音上てほりけふ飛驒も主計頭左京大夫面々の馬駿を後小  
 立曹とけき塙の立木も手とりけ其外龍兵共塙のまきひも志  
 きて掛の影も有ればあまは、大將軍の上意あり連日籠城の苦勞  
 采水もくして堅固小城を防ぎ敵の武勇を奮まは感悦糾か  
 らぬ城内いふも心強く思へ何程の大軍もまとも即時  
 切崩し急運を開きとて急いで飛驒も大音も急いで上意

申上るふては寔に有難き上意を承り百万石の加勢よりも  
 城内競ていふ事然らば根柢披露せしむと各けまは上使の既  
 駢ゆりけふ城内の上下上意を関より大ふ力と得る一國の感  
 一奉り流石に殿下の賢息と云き山器量より當年十六歳小  
 大と成せ給ふ孫吳が肺肝より流出し給ふ尊将の四國九  
 國の大小名五十六十及て其名久しく人小唱くも大将衆人有け  
 ぶ此河に及び十六の老翁六旬の少年がと譽門毀つ矢に  
 一吉が家中より領地の高向と五人柄千人の中も務る男も以外  
 腰拔て此彼と争ふ小屋居るが奴系十人餘りも有り將軍公  
 の心腹を現し聞て早龍城を用ひと思はるる氣を以てよやく

とくくと出てさままといひひりりれ川村十助大河内をた巻討  
 て初々大将の心腹を臆病者の妙業と見たり女百の敗軍より目  
 も見ればおぬ系が鐘下らおひあましく可笑しき如何に己等又敵に  
 一左衛門の眼を以てま折らぬまま一塀裏の役も立早失倉  
 仍耳の空石をさそと志やうと持てる彼十餘人の者共物と云  
 び頭をまげ移り口系一吉清正折る通りなると定を止めて是と  
 聞て清正なる人間の強弱を把握も替る物にあらざらば  
 給ふ知行の川よりととておぬ系能次多と思はるるや清正幸長  
 少回す小室の土木侯彦三郎晝夜の振を見たり比類ありん  
 系ふつ川も運を閉申のく過るの加増し給ふ一又此河の家を

歴々として見しるる男二人昨日の大攻の内小御共思ふ所一宿を控  
 捨て紅繪のうしろの夜有大夜着とて紫のうしろのうしろ眼小  
 佛もあはれ侍もあはれ侍ありきりる所遠くまで若くもバホーの  
 きて彼奴系が家中の差引もよお妙小大なる腰抜かり仇つらひす  
 たりし不幸いそも存あり急小首を刎死しとぞありける  
 廿八日大明人大軍もよお蔚山小地と云小勢と云旁陣を廻きり  
 と雲小振り人馬腰兵糧より少てあはれしるる小城の外小固り  
 一六敵も城と等く仇つらひ然も共数万騎の大軍後の小城  
 一攻落さざしとぞめくと引返す事大明の恥辱と思はれ吉主  
 計匠小仕一團本城後者と云者去子知有て日本を去奔一年比

大明小住して今為蔚山小向ひ八千騎の大將少て来りたるが彼と  
 お人の王の大使として今日己の計小扱を令えたるも城内の  
 勇力は鉄るん次第あり此六城を用渡して身命を助り日本大  
 王(忠節)ありとあり城内より田中大河内九津見三人出で城後  
 ち互小名兼合々右の口上と聞大河内使番るもバ行て三将中一  
 と田中九津見と云ると大河内園本小向ていふ小城後後の中日本  
 の人ありしが柳や命が惜きとて敵小城を渡して北退法や有  
 き唐國の事あり我朝よ於て此例を聞ぞ其旨大將(申)あり  
 己が身命助りしは小法を記事を申とて念ふべき一定あり左の  
 如くある臆病沙汰大將(申)と覺悟よ及べし城内水兵糧少とぞ



の名代も此方お王の月一人入城も成難し然らば以下の人質は  
 ちよ一其上大國小偽ふきの條正月三日午の時小會盟と有るれ  
 城より尤と返事して其報極り使に既不ゆぬ是より敵味方  
 矢と止るもども城内小少も心とあつたてて堀裏を堅  
 ちりふ然まに大河内膳當六止り脚絆をはき居るが脚絆の  
 緒も解けて足首よりあり昨日も下里へ引上りめ結ひ  
 置小又下りれば夫少く心付膳肉落くおそと思ひ脚絆を以て  
 見え只竹の筒をさぐる如くそ膳の肉に少くもあくて骨に  
 皮のうま計かり傍ま小山川長多餘尉と云者甚く一死に付  
 小く常小頼骨あきて眼も大小口廣き男おれが面を見せと

思ひ大河内山川少向ひの道胃を脱く頼高とて面を見せ  
 と云ふまに山川谷で敵俄責の胃を煮る際あるまきと云  
 を無理小脱きて見せは是小何したと云ふ格もあき面神只繪小  
 畫の餓鬼小異るべ諸軍兵をを見り一同小まを打て高来  
 又落涙ももあり大河内まらる此式もて敵一人合ふよと  
 成難るべ我氏神大菩薩を信し奉まば四足と堅く禁たるが  
 此時の事あれがとて死ふ馬の股を切れて矢の根小貫き射  
 一矢共と新と焼て食ける諸人を見見ていふ大河内味方  
 やと同答て我味方の構に力よさる成は石共吞て唐人も人合  
 手ふさし為るりと云ふまに我も人も尤とて食へる程小四



五丈のふの足程をく皆よしなまども大勢の軍成咽と活に  
移す無りけり

廿九日敵味方互小物静ふり去共城内小昼夜眼と合せび堅め

る城内は彼の矢倉下道脇の目表ふ士足輕人夫等小限りぞ

飢渴の上の寒雜小痛も五十人三十人々後もれ又其好も

まて頭を低ま伏居けるを教と知に早三日も身ごきもせ

はまぐ堀裏廻る軍士瘡を自らうらむとどしに歳日もこうら

さりしかは錢の石突を以て刻傷し見まび悉く居まらん小敵或ら

水小用られぬ死居たりりり哀共言言ふ小休難き龍城より角

て今敵責とゆへ休息の隙ありけき清心加藤与平次と

具一本丸一吉の元来て大河内茂方為尉と近付廿三日熱極大破

の刻ひ道は類なき敵の二より矢倉より朗小一覽ま大手の門の殿ハ

内邊搦手の門の殿与平治まりとまり大河内泰き少刻と取りは

共某の曾て殿ふていひ廿二日の大敗軍小馬教を所射らま得は出

立の仕合らるよ依ておのけく遅く取入る小射以て殿仕とまお存

手以らむ也家の与平治成る心とるを左末大更夜と先も互々

其上馬踏小輪とけ敵小打せ候して及の事是古今無双の名高

き殿中ふんと共合まを清心大悦の氣色ふて大々突ひひ道正直道

る人ふ心掛あれ建も跡小退る者を殿とい言也建則其日のお人

と敵と同派小書載りり相城下と見えは城内敵より射る矢先



石垣小雷り落積り一八間の石垣三間余を悉矢ふりりり

奥國中押働の道筋も諸人大小濫妨は秀元も日本帰朝の

土産と思つて綾錦金襴八系無後服子色の巻物見

びて又明日能を見てもおぼあくる少くも芳きる焼捨る類

少るは計をすづり取三百七十巻あり諸人悉くお仕せり

跡して大かぶ藏も皆焼散して通る秀元母妙玄院土産小

と心けしある印子の釋迦紺紙書流の類るる能筆の法華經

其外弓矢矢籠茶碗硯心下色松の朝鮮道具を牛二匹小

付し蔚山の小屋まで着て持来りしに十方騎小追馬を踏

殺し多る体るれは中平抄に焼失を其のみあり大岡殿下より

澤願せし山羽織黄金秀元重代備茶兼光が脇差ふふと  
悉く炎上りありき

一吉清正チンセンと云所は逗留の内も家の軍勢を以て山を巻虎

狩せし虎老るから向ふ居る吉清正軍士盛るるお頭を食ひ

がま小まづに腕をくひぬぐれて忽小死りけしは大事に

軍を以て所詮はらざる事とて虎狩を止りけしは朝鮮出で

も虎りの功を殊小大勇と定まり又小キキと云所出で押入る

小丁餘の田切有る馬の太股を責るなどおれは泥をこまて乗

波も事成難しお向きと云如小近お小大さふる花あり打

破見ま唐木棉をはめおるり事と云出し二丁余の深泥を木

2104  
2

柳をたて巻くうめく人馬を通へるをひく人馬のまうと馬の出  
 ぶまでくる唐木棉を引裂いて用たり押陣の内へまきまき  
 不以鶴白鳥を初ても魚類の菓子小ぶまで日本小て  
 菜を用たり猶澤山小腹けり秀元八幡宮と信仰し奉むバ  
 四足を用たりととも異國波海の名譽の為小虎を腹しき  
 金翅鳥とも食けり羊車遊覧小大さかば事最艶や  
 ぶふ所柄日本小もくふき松うけはりの道廣ハ三十五間二十  
 五間より狭きふ一里の境國境小大石を以て八角小切て大  
 文字小銘を切付立てあり

朝鮮物語卷之中終

